

■■ 早川孝太郎の人と作品（三州横山話解説） ■■

おお とう とき ひこ
大 藤 時 彦

早川孝太郎氏は三州 横山（いまの愛知県新城市横山にあたる）の出身である。ところで、この「三州横山」は、私どもには強い印象を伴ったところである。というのも、柳田国男先生が監修された炉辺叢書の一冊として、早川氏が『三州横山話』という著作を出版されたことによる。この本の解題を書かれた柳田先生はつぎのごとく言われている。

「横山は豊川鉄道の終点に近く、長篠の古戦場から寒狭川の流れをへだてて、丘陵の側面に成長したわずかばかりの村落である。中から観ても外から望んでも、近傍幾多の農村とと比較して、別にこれという特色はないのであるが、著者早川君がこの村に生まれたというただひとつの理由で、文字以外の非常に豊富なる史料が、談話となって充ち溢れている土地であることが世に知られた。またいかなる美しさを味わいつつあったかを、一言の形容詞を備わずにあらかた感得することができるのである」と述べられ、最後に「早川君の本業は画家であって、もっともその感覚に忠であったことは、ことにこの君の幸福である」と結ばれている。

芥川 龍之介は、この『三州横山話』について柳田国男の『遠野物語』以来、もっとも興味のある伝説集であろうとあって、この本にある盗賊の用心や火の用心に対するまじないの歌を紹介している。そして「それらは家に命を感じた古 びとの面目を見るようである。こういう感情はわれわれの中にもとうの昔に死んでしまった。われわれよりも後に生まれるものはこれらの歌を読んだにしろ、なんの感銘も受けないかもしれない。あるいはまた鉄筋コンクリートの借家住まいをするようになって、これらの歌は幻 のように山かげに散在する茅葺屋根を思い出させてくれるかもしれない」と記している。

早川氏が学会において有名になられたのは、氏の郷里の北方、北設楽郡の各地にある花祭 という芸能を長年にわたって綿密に調査され、『花祭』という大著を著わされたためである。

これによって花祭はわが国におけるもっとも価値ある民族芸能の一つとなり、それを見

学に行く者、いわゆる花狂いといわれる多数の人々を生ぜしめたのである。これほど細密な民族芸能の記録は今日まで見られないのである。私も花祭を見学に行ったことがあるが、どこに行っても早川氏の名を村人たちは口にしていた。

柳田先生は『花祭』の序文を書かれた一節いっせつにつぎのごとくいわれている。「自分は何人なんびとよりも切実にこの採集者の深き用意に感謝し、かつ早川君志すところの学問の前途のため、あらためて多くの期待を抱きうるにいたったことをよろこぶものである。たんなるうろ覚え、また聞き程度をもってとどめておくことの出来ない性質を、早川君という人は持っている。そうして見にいった結果がついにこういう大変なことになってしまった。千六百ページの大著は出現し、いやしくも民間芸術を談ずるものはこれを知らなければ恥というまでになった。」

さて、こんど学術文庫の一冊として刊行されることになった『猪いのしし・鹿しか・狸たぬき』は、大正十五年に郷土研究社第二叢書そうしょとして出版されたものである。早川氏の同書の跋文によれば、前著『三州横山話』と切り離せないものである。話の内容としては、その全部が本来『三州横山話』と一緒に語るべき性質のもので、話の範囲も横山の村を中心としたわずかずうりにわたる以外はほとんど及んでいず、ことごとくそこで生まれて成長したものであるという。しかし、そのことをとおして「三州横山」の山村はひとつの小宇宙としてわれわれの眼前に現出することになる。そしてそれは「民俗」の姿をわれわれに示すとともに学問的にもきわめて豊富な沃地であった。

著者によれば、横山付近の土地がもはや獣けものにとつてすでに足跡のあまり濃い地方ではなかったというが、早川氏なればこそこれだけの話が聞き出せたといえる。『三州横山話』が、そこに住む人々の「心のひだ」を記録したものとするなら、本書によってこそ、動物たちと人との交渉をとおして「三州横山」の人々の「くらしのひだ」が永遠に記念されることになったといえる。それゆえ中国の周作人（文学者、魯迅の実弟、一八八五～一九六六）は、早川氏の愛読者であったが、学者兼画家であるため観察や描写が細密であり、文筆ははなはだ精妙せいみょうであると賞し、『猪いのしし・鹿しか・狸たぬき』をもっとも好きな本であるといつて長い紹介をこころみたのである。

そこで本書内容の順に従って、私なりに興味があり、気のついたことを述べてみよう。

まず狩人についての昔話がひとつあげてある。

ある狩人が、^{ろへん}炉辺で翌日使う鉄砲の丸を^{たま}茶釜の蓋の上でせっせと丸めていた。向かいの^{ろばた}炉端に飼猫が坐ってじっと手つきを見ていた。丸がひとつできあがるごとに、猫は^{まえあし}前肢をあげて耳の後ろから前へ一回越えさせた。

翌朝狩人が狩に行こうと思って炉の^た茶釜に焚きつけたが、不思議に茶釜の蓋もなく飼猫の姿も見えない。狩人がしたくをして山へ行くと、行く手の岩の上の松の木から怪しい光が^{たまごめ}さす。丸込めして一発狙ったが手ごたえがない。つづけてうったが、ついに丸を使い果たしてしまった。するとはじめにチャリンと^{かなもの}金物の音がした。狩人は怪しい光が消えないので、最後にとって置きの丸で撃つと手ごたえがあった。

岩の下に入ってみると、飼猫が頭を撃たれて死んでいた。はじめの丸は茶釜の蓋で防いでいたのである。

これは、わが国では「猫と茶釜の蓋」といわれている種類の昔話で、東北地方から九州にまでまたがる、分布のひろい話である。かくし丸がなくなると怪物が大猫となって狩人に飛びかかってきたという話し方もある。

ただこの三河の話でおもしろいのは、早川氏の言われているとおり、茶釜の蓋の上で狩人^{てっぽうだま}が鉄砲玉をこしらえることが実際に見られることである。この狩人の持っているかくし丸は、獲物に命中した丸を貯えておき新しい鉛にそれをまぜて次の丸をつくるといい、これをシャチダマ、ユルシノタマ、アタリダマなどと呼んでいる。

またこの早川氏の著書の中にはいろいろの挿絵がのせてある。その中のひとつに^{しかぶえ}鹿笛があるのが私には興味深い。私は昭和十年のころ、^{ぶしゅうひのはら}武州檜原村を訪ねたとき山中の狩人の家でこの鹿笛を見せてもらった。そのときヒキガエル（蟄）の皮を笛をつくるのに用いると聞いたが、早川氏も同じことを書いておられる。最初に大きなヒキガエルを見つけて皮を剥いで逃がしてやる。一年たってからまた同じヒキガエルを見出して、二度目の皮を剥ぐ。

このようにして同じことを六年くり返して、七年目にできた^は薄い皮を剥いで、その皮でつくった鹿笛を吹けば、^{こうかつ}どんな狡猾な鹿でもその音に誘われて来るといふ。皮を剥がれるヒキガエルは心得たもので、三年目からは皮を剥がれた場所に自分のほうから出かけてきて

待っているそうである。

鹿の話でもうひとつおもしろいのは、鹿狩りをする人たちのあいだで語られている鹿の玉の話である。これは年とった鹿の胎内たいないにあるもので、この玉を中にして鹿の仲間がたくさん集まって遊ぶといわれている。その玉を角つのにいただき、角から角へと渡して興ずるので、鹿の玉遊びほうらくといって鹿にとっては無上の豊楽であるという。人間の家でこの玉をもっていれば、金が自然に集まってくるといい、金銀がすっかり集まってしまうとその玉は、中のほうからだんだんとくずれてくる。鶏卵いきだまくらいの大きさで、表面しにだまがつるつるでなめらかという。この鹿の角には生玉と死玉とがあって、殺した鹿から獲たものは効果がない。村の物持ちの家などには、この玉をこっそり持ひって秘している家があるそうである。

またこの本の鹿の項目の一節に「浄瑠璃御前と鹿」という話がある。これは光明皇后が鹿の胎内より生まれたという三河鳳来寺の伝説として有名な話である。早川氏が耳で聞いた伝説では、普通に伝えられているものとは趣おもむきを異にしているという。

矢作やはぎの兼高かねたか長者が子のないのを憂さんろういて薬師堂こたねに十七日の参籠をして、子種を授けたまえと祈ったところ、満願まんがんの夜の夢に、薬師は大きな白鹿なんじとなってあらわれ、汝なんじに授くべき子種はないが一個の玉を授けるといはらう夢を見て孕んだという。また別の話では薬師が白髪はらの翁となってあらわれ、鹿の子を授くと告げて消え失せた。そして月満ちて生まれた子が浄瑠璃御前であった。輝くように美しかったが足の指が二つに裂けていた。それを隠すために布たびを足にまとうた。これが足袋のはじめであると伝えられている。

この鳳来寺伝説については、早川氏が編集註解した柳田先生の『女性と民間伝承』という書物いずみ しきぶに詳しく述べてある。また別に、先生の「和泉式部の足袋」という論考がある。この伝説は三河びぜんのほか備前にもみられるという。

話は猪くまにもどるが、熊いの胆ちんちようは薬物として珍重きされているが、猪の胆の同様に考えられていたという。万病に効くといきって村の物持ちといわれるほどの家ではかならず買って貯

えてあった。狩人自身も糸で結えて陰乾しかげぼにしておき、小刻みに刻んで売った。ときとすると、肉全部よりも一個の胆のほうが高く売れたという。明治になったのちでも、胆がひとつ七十五銭で、猪の骸むくろは二十五銭くらいにしかならぬこともあった。大猪の胆であれば米の三俵や五俵にかえるのはわけはなかったという。ついでに述べると、狩人は多く、猪の臓腑ぞうふだけを煮て食べて、肉は猪買いに売ったそうである。

終わりに狸たぬきの項目についてちょっと触れておきたい。狸は猪や鹿とちがって怪談やわるさ話が多く語られている。狸を追いかけて一発撃つとコロリと死んだ真似まねをする。近寄るときに油断ゆだんをすると、起き上がって逃げだすと各地でいわれている。

狸について「砂播きの狸」の話もよく聞く。柳田先生も利根川畔の砂播き狸について書かれたことがある。早川氏の話では、小石まじりの砂を掛けられたとある。

また、諸地方の水辺に小豆とぎみずべという怪異あずきのあることをよくきく。小豆をとぐような音をたてるという。土地によってはこれをムジナのしわざかいといっている。

さてこのムジナと狸であるが、ふたつは同じものという説と、別物だという説がある。横山の狩人の話では見た目でその区別はすぐわかるが、素人には容易にわからないという。

あし
肢の裏にアカギレがあったら狸だといっている。しかし辞書を見るとムジナはアナグマの別称と狸の別称の両義があるようである。早川氏の著作として有名なものは、上記のほか『農と祭り』がある。これは、東北地方の民間信仰をはじめとして農村における祭事について考察したものである。

最後に、早川氏の研究歴について書いておきたい。早川氏がどういう機縁きえんで民俗の研究をされるようになったか、いまではもうお尋ねすることも出来なくなってしまった。ただわかっていることは、柳田国男先生が大正二年に創刊された『郷土研究』という雑誌の読

者であったことである。否、読者であるばかりでなく、この雑誌にしばしば郷里における民俗について投稿された。同誌二巻十二号に「三州長篠より」と題して南設楽郡東郷村を中心とした民俗伝説が報告してある。内容はニューギいな（新木、正月に門口におく木）、臼

を尊重する習慣、守護神と水恋鳥みずこいどりである。水恋鳥は、姑を虐待した報いで鳥に生まれかわっ

た女についての話の断片である。同誌三巻二号には郷里の長篠村横山付近におけるいろいろの蛇についての伝承が報告してある。この時分に早川氏が郷里におられたかどうかかわらないが、大正六年の『郷土研究』終刊号にみえた寄稿者名簿には、住所が東京の池の端いけ はた七軒町しちけんちょうとなっているので、そのときにはすでに上京されていたことがわかる。

氏は、大正九年、玄文社版『炉辺叢書』に、柳田先生と共著で『おとら狐の話』を出版された。これは、早川氏の論考に柳田先生が長文の解説を加えられたもので、先生はその中で早川氏の研究姿勢を評してつぎのようにいわれている。

「狐には人を化かすものと、人に憑くものと二種類がある。その憑き方には地方的な差異がかなりある。早川君は狐に対して実直な態度をもって記述している点が他の人々と違っている」

私は早川氏のように民俗採集に特異な能力を持った人を知らない。その採集報告には画家としての感覚がひらめいており、細密な記述は、尋常な人にはとうてい真似ることのできないものであった。早川氏は柳田先生の令弟松岡映丘れいていまつおかえいきゅうがはく画伯が主催された新興大和絵しんこうやまと え画会がかいの会員であった。

早川氏の足跡は全国各地に及んでいるが、その中でとくに注意したいのは離島の踏査とうさである。柳田先生は、わが国には大小幾多の島嶼とうしょがあり、それらの島の民俗を知ることの大切さにはやくより気づいておられた。大正十五年に地理学会で「島の話」と題する講演をされ、島の研究をする雑誌『島』を発刊された。

早川氏も、まえまえから島の生活に興味を持たれ、炉辺叢書の一冊として『羽後飛島図誌』を著し、島生活に対する興味を多くの人にひきおこした。また薩南の離島黒島に行き、『古代村落の研究くろしま』を出され、民俗学徒のあいだに強烈な印象を与えた。瀬川清子氏などはほとんど暗誦するくらい読んだといっている。そのほかトカラ列島の悪石島あくせきしまの見聞記のごときはすぐれた採集記録である。

私は早川氏というと、菅江真澄すがえ ますみのことを思い出す。真澄の東北地方の遊覧記は、民俗の

記載が^び微に入り^{さい}細を^{うが}穿っている点でよく知られている。近世においてこれだけの記録を残しておいてくれた真澄の功績は、実に貴重なもので、われわれの感謝おくあたわざるものである。早川氏は、旅に出て故郷に還らずに生涯を終えた真澄とはまったくちがっているが、氏の民俗採集記は真澄を思い出させる。両者が画人である点も偶然に一致している。また、真澄の郷里は早川と同じく三河であった。柳田先生の依頼もあったと思うが、早川氏は豊橋を中心とした真澄の本姓である白川姓の家をたんねんに一軒一軒訪ねまわって真澄の生家を探りだそうとされた。そのいきさつについては、「還らぬ人菅江真澄の故郷」と題して雑誌『旅と伝説』（五巻八号）にこと細かに氏によって執筆されている。

柳田国男先生は、大学を卒業されてから、すぐ農商務省農務局に就職され、直接農政の実務にたずさわられ、産業組合の育成に努力されて全国各地を視察された。また農業政策などについて各大学で講義を受け持たれた。そして中年のころより民俗学の研究に専心されるようになった。

これに対して、早川孝太郎氏は反対に、民俗の研究から出発され、前述したような著作を発表された。その後九州大学の小出満二^{こいで みつじ}氏の研究室に籍をおかれ、九州各地の農村を調査されるようになり、民俗の採集とともに農政問題に注意を向けられるようになった。農業経営や農業技術に関する発表としては、「村松家作物覚帳」や「佐賀県稲作坪刈の研究」がある。

農政の実務に関心を持たれるようになった早川氏は、第二次大戦の徴候があらわれはじめるころに農村更生協会に入って仕事をされるようになった。『村』という雑誌などに農業経済に関する考察を発表されるようになった。戦時の食料問題が論ぜられるようになると稗作^{ひえ}のことを取り上げ、「農と稗」などを執筆された。そのため朝鮮や満蒙の食生活についても研究された。

農業経営についての早川氏の業績として是非ともあげておかねばならないのは、近世の農政学者大蔵永常^{おおくらながつね}の伝記、業績についての著作である。これについてはずいぶん長い年月をかけて苦心されたということである。

終わりに早川氏は農村指導者を養成する鯉淵学園^{こいぶち}において講義を受けもたれていたことを記しておきたい。